ネパールから考えよう

学校所在府県：大阪府
学 校 名：大阪市立東中川小学校
名　　前：福井　雅彦
実践教科：総合的な学習の時間

指導時数：５時間
対象学年：東中川小学校５年生
対象人数：44 人（２クラス）

1. 教師海外研修を通して感じたこと

普段の観光旅行では決して入ることのできない施設に行って視察することができたり、青年海外協力隊や JICA ネパール事務所・現地 NGO の方々に話を聞くことができたりしたことは、大変貴重な経験になり、自分の財産になった。

また、村の一般家庭にホームステイをすることができたのは、大変有意義な体験であった。ご主人と地震の時の話をしたり、経済状態の話をしたりして、生活の苦しさを目の当たりにすることができた。その中でも笑顔を絶やさないことは、自分自身の毎日を振り返るきっかけとなった。小学生の子どもとサッカーをしたり、馬跳びをしたり、折り紙を一緒に折って交流できた。とても社交的な子で、明るさをもらった。しかし、サッカーボールがぼろぼろであったり、靴も持っていないという現状も見ることができた。

学校へ行って子ども達と交流したり、考えていった「防災体操」を一緒にしたりしたことは、とても楽しかった。子ども達の方から寄ってきて、自分の教室に手を引いて連れて行ってくれた。授業中でも先生を含めみんなで歓迎してくれて嬉しかった。

2. カリキュラム

（1）実践の目的・背景

本学年の児童は子どもらしい面を多く持っている。人なつっこく、近所の人にもよく挨拶をする。低学年の児童に優しく接している場面も多く見られる。しかし、なかま意識は非常に薄く、きつい言葉で友達をせめる場面がよく見られる。また、価値観が画一化しており、少し違う行動をしたり考えを持っていたりすると排除するような言動をとる。

学年当初から、「いろんな人がいていいんだ・自分の周りが世界のすべてではない」というコンセプトで学年で協同してさまざまな取り組みを行ってきた。例えば、社会科の「暖かい地方のくらし」の発展学習として沖縄戦を扱ったアニメ映画を見た。また、英語を教えてもらっているＡＬＴのアメリカから来た先生にアメリカの小学校について話してもらった。道徳の時間には絵本を使っていじめについて学習した。リオデジャネイロで開かれたパラリンピックをテレビで鑑賞した。児童はどんな時も真剣に見聞きし、しっかりした感想を持つことができている。しかし、どうしても今の自分の周り、クラスとは違うものとしての考えを脱却できない。

今後も「大阪人権博物館」への社会見学をはじめ、いろんな学習を通じて児童の価値観や世界観を広げていきたい。

その一環として、今回のネパールへの教師海外研修で得たことを利用して国際理解教育・開発教育の実践を行う。実際にネパールで見たこと・聞いたことに関して写真・ビデオ・実物を使って児童に説明していく。ネパールの衣食住・抱えている問題・教育制度・学校の様子・日本とネパールのつながり・政府や NGO がネパールでおこなっていることなどについてワークシートに自分の考えも書かせながら進めていきたい。一方的に説明するだけの授業にならないように、グループ活動もできるだけ取り入れていきたい。

そして、児童が「日本に生まれてよかった。」「途上国には行きたくない。」という考えに固まるよ

うなことがないよう、授業者の説明や子ども達の笑顔の写真をつかって意識を変えていきたい。
　また、この学習をきっかけに、他の国にも関心を持ったり、自分にできることを考えたりできるようにしたい。
　最終的にはひとりひとりを大切にし、いろんな違いを認められるような児童になることを目指していきたい。

（2）授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 ネパールって どんなとこ？ ＊ネパールに関する基礎知識を学ぶ。	●ネパールの地理的概要　面積　人口　日本とネパールのつながりを簡単に説明する。 ●ネパールの町の様子をビデオや写真を見せて説明する。 ●ネパールの学校の様子をビデオや写真を見せて説明する。 ●ネパールについて感じたこと、もっと知りたいことをワークシートに書く。	●自作パワーポイント ●世界地図 ●ネパール地図 ●ワークシート
2・3 時限目 ネパールと 日本の違い	●ホームステイ先の家や村のくらしを紹介し、ネパールの田舎の人々のくらしを知る。 ●「レヌカのくらし（レヌカの学びの改訂版）」の実践を通して、日本とネパールのくらしや考え方の違いを学習する。	●ワークシート ●自作パワーポイント
4 時限目 ネパール大地震から 考えよう	●ネパール大地震について動画などを用いて説明する。 ●訪問先の学校で行われた避難訓練のようすを動画を用いて紹介する。 ●東北大震災の時のネパールからの支援を紹介する。	●ワークシート ●ビデオ映像
5 時限目 ネパールの子ども達、 そして世界の子ども	●ネパールの子ども達の就学率を説明し、学校に行きたくても行けない子どもがいることを学習する。 ●世界の子どもの就学率・乳児死亡率・貧困率などを学習し、世界の子どもが置かれている現状を知る。 ●自分に何ができるかを考える。	●ワークシート

3. 授業の詳細

1 時限目：ネパールってどんなとこ？

ねらい…ネパールに関する基礎知識を学ぶ・ネパールに関心を持つ

◆内容◆

① ネパールへ行った目的を説明する。
② ネパールについて簡単な知識を、クイズにして学習する。
　・位置　・国旗　・面積　・人口　・首都
　・１人あたりＧＤＰ
　・在ネパール日本人数
　・在日ネパール人数
　・エベレスト
③ ネパールのようすを撮影してきたビデオを見せて説明する。
　・町（市場）のようす
　・訪問した学校のようす
　・ホームステイした家・村のようす
④ ネパールの食べ物について写真を見せて説明する。
⑤ ワークシートに感想・もっと知りたいことについて記入する。

授業風景

ココがポイント

・クイズ形式にすることで児童が楽しみながら自分で考えることができるようにする。
・写真やビデオを電子黒板で見せることで児童の関心を引くようにする。

児童の感想

▶ バイクがいっぱい走ってたのがびっくりした。
▶ ネパールのごはんを食べてみたい。
▶ ネパールに行っている気分でした。
▶ 町の感じは信号もなくてあぶないなと思った。

◆所感◆　導入としてネパールのことをクイズ形式で行ったことで、児童に興味・関心を持たせることができた。土曜授業の参観で行ったこともあり、保護者の方にも参観にいただき、児童と同じようにクイズを楽しんでおられたのは啓発として意義があった。

2・3時限目：「ネパールと日本の違い」

ねらい…ネパールと日本の違いに関して、ホームステイしたネパールの村のくらしと、ネパールから日本に来た人の生活についてのエピソードをもとに考える。

◆内容◆

① ホームステイした家・村のようすを写真やビデオを写して学習する。
② 「レヌカの学び」を改訂した「レヌカのくらし」の資料を用い、ネパールと日本の生活習慣や考え方の違いを知る。
・学校給食
・夢
・仕事　など

授業風景

ココがポイント

・「レヌカの学び」を小学生向けに改訂することで児童にも感心を持って取り組むことができるようにする。
・グループで答えを考えることでいろいろな意見を交流することかできるようにする。

児童の感想

▶ 自分の思っていなかったことがあって、いろいろ知ることができました。
▶ 「えーそうなん。」とびっくりした問題があった。
▶ ネパールでもスマホを持ってフェイスブックをしているのに驚いた。

◆所感◆　ホームステイした家・村のようすを写真などで提示すると、今の自分たちのくらしとあまりにも違うので驚いていた。ただ、ホームステイ先は農村であり、牛などを飼って牛乳を売るなどして生計を立てていた。都会に住んでいて会社で働いている家庭の子どもが多いクラスの子にとって、農家のくらし自体が想像できにくいものであった。

「レヌカの学び」を改訂した「レヌカのくらし」の資料は、各質問に対して「日本でのこと」「ネパールでのこと」「両方当てはまること」の３つから答えを選び、そう考えた理由も考えるという活動をしたが、指導者側の説明が足りなかったこともあり、「両方当てはまること」を答えとするグループが多く出てうまくいったとは言えない。しかし、答え合わせをした時には、「ネパールでは医療費が高いので軽い風邪でもひどくならないうちに仕事を休むよ」などの説明にとても驚いていた。そんなネパールで多くの人がスマートフォンを持っていることにもとても驚いていた。

４時限目：「ネパール大地震から考えよう」

ねらい…ネパール大地震のことを知る。地震後、青年海外協力隊の方が中心になって小中学校で避難訓練を行ったことのようすをビデオで紹介し、当たり前のように行ってきた避難訓練の大切さを知ると共に、日本がネパールに行っていることを知る。
日本がネパールに支援をしているだけではなく、ネパールも東北大震災の時に日本に支援を行ったことを知る。

◆内容◆

① ネパール大地震のことを写真を用いたり、具体的な数字を示したりして学習する。
② 研修で参観した青年海外協力隊が中心となって行った小中学校での避難訓練のようすを見せ、自分たちがやっている避難訓練との違いを話し合う。
③ 東北大震災の時にはネパールから毛布の支援を受けたことを知る。

ココがポイント

・シャプラニールからいただいた DVD から、地震直後の様子が写されている場面を見せ、被害の様子を分かりやすくする。
・学校での避難訓練を見学したときに撮影したビデオ映像を見せ、学校の様子が視覚的に分かるようにする。

児童の感想

▶ 避難訓練を今までやったことがないと知ってびっくりしました。またネパールに地震がきたときにどうすればいいか分かるように教えてもらったのでよかったと思います。
▶ 避難訓練の時、自分達は机の下に隠れるけど、ネパールの人たちはリュックや手、紙で頭を守っていたからびっくりした。
▶ 日本が地震の時に、ネパールから 5000 枚毛布をくれたと聞いてとてもありがたいと思った。
▶ 日本もネパールも助け合っている。

◆所感◆　大きな地震を経験したことのない児童にとって、ネパール大地震の時の映像や実際の被害の数字は思っていた以上にインパクトがあった。

東北大震災の時にネパールから毛布 5000 枚を送ってもらったことに対して、その数が多いのか少ないのか分かりにくかったが、少なくてもお互いの思いやりが大切であることが分かった。

５時限目：「ネパールの子ども達、そして世界の子ども」

ねらい…ネパールの子ども達の就学率を知り、どうして学校に行けない子どもがいるのか、学校に行かなくなる子どもがいるのかを知る。
世界に目を向け、子ども達や人々の就学率・乳児死亡率・貧困率を知り、世界の現状や当たり前のように食事をし、安全な水を飲み、学校に行っている今のくらしを振り返り、自分にできることを考える。

◆内容◆

① ネパール教育局訪問の際にいただいた資料を元に、小学校入学時・５年生時・８年生（義務教育修了時）の就学率を具体的な数字を示して学習する。どうして学校に行かなくなるのか、ワークシートに自分の考えを書き、全体で交流する。

② 世界全体の現状をクイズ形式で考える。
- 世界で学校に行けない子どもの数
- 世界で１日１ドル以下で生活している人の数
- 世界で安全な水を使うことができる人の数
- 世界で５才までに死んでしまう子どもの数

③ 自分のできることを考え、ワークシートに書く。

④ ネパールの学習を通しての感想を書く。

ホームステイ先の子どものサッカーボール

ココがポイント

・クイズ形式にすることで児童の興味を引くようにする。

児童の感想

▶ ネパールであまり裕福ではない人がたくさんいたので、私にできることがあれば何かしてみたいです。

▶ ロミ君のサッカーボールの写真を見て物を大切にしようと思ったし、今の日本のくらしをありがたいと思った。

▶ 私はその人達（世界で困っている人）に何もしてあげることができないけど、自分はそういう人がいることを知ったので物や家族を大切にしようと思います。

◆所感◆　前時でネパールの小中学校での避難訓練のようすを紹介したので、児童はネパールの学校生活にも興味を持っていた。そこで、実際には学校に行きたくても行けない子どもがネパールにはまだまだたくさんいることを学習した。「どうして学校に行かない子がいるのか？」という発問には「いじめられているから」「めんどくさいから」などの意見が多く、「家の手伝い」や「親の考え」などの意見はほとんど聞かれなかった。実情を解説すると児童はとても驚いていた。「学校に行かないとどうなる？」という発問にも、「アホになる」ぐらいの答えしか聞かれなかったが、「駅や町の標識も読めない」「薬の表示も分からないかもしれない」と説明するとびっくりしていた。その後の世界の現状の学習でも、自分の予想よりとても多くの人々が苦しい生活をしているということは初めて知った児童が多く、口々に「えー」という声が聞かれた。特に、「４秒に１人の人々が５才までに死んでいることになる」ということに対しては、非常にショックを受けていた。この時間で児童は自分たちの周りの世界が地球上の全てではないということを少しでも理解できたのではないかと思う。

4. 成果

今回、計５時間の実践を行った。児童は初めネパールという国の名前は知っていたが、どこにあるのかも全く知らない状態だった。そんな児童達が今回の実践を通してネパールのこと、同じ年代の子どもが自分達と全く違うくらしをしていること、日本人がネパールのためにがんばっていること、そして世界の人々が置かれている現状を知ることができて視野が広がったのは良かった。

視聴覚機器を多用し、視覚的に興味を引くように心がけたり、帽子や教科書やお札などの実物に触れるようにしたり、給食時間に岩塩を食べてみたりしたことにより、児童はネパールにとても興味を持つことができた。

「テレビから『ネパール』という言葉が聞こえてくると、反応するようになりました。」という感想や、校区内にあるネパール料理店に家族で食事に行く児童がいたことは、とても嬉しくほっこりした思いを持った。

5. 課題

授業に関しては、もっと話し合い活動を入れて自分の意見を話したり友達の意見を聞いたりするような活動を多用した方がよかった。

また、児童に伝えたいことが多すぎて、いろんなことを学習した結果、少し混乱することにもつながってしまった。

何より、児童の普段のようすが変わったかというとそうでもない。物や食べ物を大切にしないところなどは変わらない。「遠い国のこと」という認識はまだまだ残っている。今後も開発教育をはじめいろんな実践を行っていき、自分の考え方を少しでも広めていかなければならない。

ホームステイ先の家のようす

訪問した学校のようす